

モーパッサンの幻想短編小説（三）

野 浪 嗣 生

すでに前世紀末から19世紀初頭にかけてメスマール (F. A. Mesmer) のような人がいたが (*Le Horla* の中でモーパッサンも名前を挙げている), 19世紀に入ってからヨーロッパでは精神医学ないしは精神病理学の研究が急速に進展していく。著名なところでは例えばイギリスではブレイド (J. Braid) の *Neurypnology, or the Rationale of nervous sleep, considered in relation with animal magnetism* (1843) が (彼は催眠状態を生じる方法を発見し, シャルコに影響を与える), あるいはイタリアでは著名な犯罪学者のロンブロゾ (C. Lombroso) の *Genio e follia* (1877), *l'Uomo delinquente* (1877) などが出版され, そしてフランスでは, フロイトもその講義を聞いたことがあるというシャルコ (J. Charcot) の *Leçon sur les maladies du système nerveux* (1885), シモン (P. M. Simon) *L'Imagination dans la folie* (1876), シャルコとリシェール (P. Richer) *Les Démoniaques dans l'art* (1887) といった著作が出版されている。R. デュメニルは :

Le Horla a paru dans le *Gil Blas* du 26 octobre 1886. C'était le temps où tout Paris s'occupait des leçons de Charcot à la Salpêtrière, où dans les salons et dans les journaux, les maladies de la personnalité, les troubles nerveux, l'hystérie, fournissaient matière à discussion. ⁽¹⁾

と述べているが, モーパッサンももちろん無関心であるはずはなく, むしろ積極的に関心を持っていた。たとえば *Le Horla* (deuxième version) の中で, 主人公はいとこの家で出会った博士を紹介して:

(1) R. Dumesnil, *Guy de Maupassant*, Tallandier, 1947, p. 233

(...) le docteur Parent, qui s'occupe beaucoup des maladies nerveuses et des manifestations extraordinaires auxquelles donnent lieu en ce moment les expériences sur l'hypnotisme et la suggestion.

Il nous raconta longtemps les résultats prodigieux obtenus par des savants anglais et par les médecins de l'école de Nancy.⁽²⁾

と述べた箇所にもられるように、あるいはまたシャルコへの言及が *Magnétisme, Un fou?* などいくつかの作品のなかでみられることから、この種の問題・研究に興味を抱いていたことは明らかである。そしてその成果・知識を有効に利用して、自分の作品に取り入れているのは言うまでもない。そこで、モーパッサンのこの方面における知識、理解度がどの程度であったのかを具体的に見るために、作者自身と作中人物とがまったく関わりのない、三人称形式で物語られる作品 *L'auberge* をすこし詳しく見てみようと思う。というのもこの作品で作者は作中人物の心の推移、つまり漠とした不安から始まり、ついで不安が恐怖に変わり、恐怖が次第に募っていき、幻覚・幻聴を覚え、ついには狂人になってしまう過程を、まるで臨床医学でもあるかのようにかなり詳細に、しかも客観性を持って追っているからである。つまり、モーパッサンが狂気や恐怖と幻覚との関係をどのように把握していたかが良く分かるように思える作品だからである。

では若い山案内人ウルリッヒがおかれた状況とその時の心理状態とを順を追って見ていくことにしよう。その日、老案内人ガスパールは朝早くカモシカ撃ちに出掛けてしまう。ウルリッヒは朝寝坊して遅い朝食を犬と一緒に食べたあと、物悲しい気持ちとひとりであることの恐れを感じる：

(...) puis il se sentit triste, effrayé même de la solitude,⁽³⁾

ここですでにウルリッヒが孤独を感じていることに注意しておきたい。そこで彼はガスパールを迎えに行くことにする。相棒を探して雪の降り積

(2) *Maupassant contes et nouvelles, tome II*, Bibliothèque de la Pléiade, 1979, p. 922, 以下 Pléiade II と略。

(3) *ibid.*, p. 788

もった山を歩き廻るが、結局見つからないまま日が暮れかかる：

Et le jeune homme eut peur tout à coup. Il lui sembla que le silence, le froid, la solitude, la mort hivernale de ces monts entraient en lui, allaient arrêter et geler son sang, raidir ses membres, faire de lui un être immobile et glacé. Et il se mit à courir, s'enfuyant vers sa demeure. Le vieux, pensait-il, était rentré pendant son absence. Il avait pris un autre chemin; il serait assis devant le feu, avec un chamois mort à ses pieds.⁽⁴⁾

ここでもまたウルリッヒは孤独を強く感じている。しかし山宿へ帰ってみてもガスパールは帰っていないし、すっかり夜になってしまっても帰ってはこない。ウルリッヒは当然いろいろその理由を考える：

Gaspard avait pu se casser une jambe, tomber dans un trou, faire un faux pas qui lui avait tordu la cheville. Et il restait étendu dans la neige, saisi, raidi par le froid, l'âme en détresse, perdu, criant peut-être au secours, appelant de toute la force de sa gorge dans le silence de la nuit.⁽⁵⁾

死んだような沈黙の雪山の中を、おそらく午後いっぱい歩き廻ったあと突然襲われる恐怖。これはもちろん死の恐怖である。また、山宿へ飛んで帰る時に、ガスパールはもう山宿へ帰っているのだと考える希望的観測。ガスパールが夜になっても帰ってこないのも、あれこれ頭に浮かぶ不吉な考え。このあたりのウルリッヒの心の動き、心理状態は間然する所のないもので、いつものことながらモーパッサンの人物掌握の的確さを明白に示している。

ウルリッヒはガスパールが夜中の一時までに小屋に帰ってこなければ探しに出掛けることにしたが、結局帰ってこなかったので探しに出掛けていき、その夜から翌日丸一日をかけてさんざん探し廻るが見つからない：

(4) *ibid.*, p. 789

(5) *ibid.*, p. 790

Comme il se trouvait trop loin de sa maison pour y rentrer, et trop fatigué pour se traîner plus longtemps, il creusa un trou dans la neige et s'y blottit avec son chien, sous une couverture qu'il avait apportée. Et ils se couchèrent l'un contre l'autre, l'homme et la bête, chauffant leurs corps l'un à l'autre et gelés jusqu'aux moelles cependant. Ulrich ne dormit guère, l'esprit hanté de visions, les membres secoués de frissons.

Le jour allait paraître quand il se releva. Ses jambes étaient raides comme des barres de fer, son âme faible à le faire crier d'angoisse, son cœur palpitant à le laisser choir d'émotion dès qu'il croyait entendre un bruit quelconque.

Il pensa soudain qu'il allait aussi mourir de froid dans cette solitude, et l'épouvante de cette mort, fouettant son énergie, réveilla sa vigueur.⁽⁶⁾

山中の雪の中で野宿をした時寒さでこごえてほとんど眠れず、すでに幻影にも捕らわれているところに注目しておこう。とにもかくにも午後の4時ごろ山宿へと帰りつき、やっとのことで食事をし、眠ってしまう：

Il dormait longtemps, très longtemps, d'un sommeil invincible. Mais soudain, une voix, un cri, un nom: 《Ulrich》, secoua son engourdissement profond et le fit se dresser.⁽⁷⁾

まる三日二晩眠らず、しかも死んだような山の中で神経を張りつめて相棒を探し廻っていたわけで、疲労困憊していることはいうまでもなく、もはや思考力もなくなただただ眠り込むしかなかったのは当然のことである。そこで突然、自分の名前を呼ぶ声を聞く。

中村希明氏は『怪談の科学』という著書の中で幻覚や幻聴を生じる原因を精神医学の立場からさまざまな例証をあげて論じておられる。そこにあ

(6) *ibid.*, p. 791

(7) *ibid.*, p. 791~92

げられている原因には精神的緊張、飢餓状態、罪悪感、不眠、孤立、極度の疲労、死の恐怖などなどいろいろあるが、ここまでのウルリッヒの場合を見ても精神的緊張、極度の疲労、不眠などがそのまま当てはまるであろう。ただでさえ「正常人においても、入眠寸前に聴覚が過敏になる時期がある⁽⁸⁾」うえに、これらの条件が加わるのであるから幻聴は必然でもあったといえるのではないだろうか。ともあれ雪の重みで軋む小屋の音か、それとも暖炉の薪の爆ぜる音か、いずれにせよそうしたちょっとした音がウルリッヒの精神的緊張、極度の疲労、十分に探さなかったという後ろめたさ・罪悪感などから、幻聴として自らの名前を呼ぶ声のように聞こえたとしてもなんら不思議ではない。

この時ウルリッヒは、今ガスパールが亡くなり、魂が肉体を離れて自分に呼び掛けに来たのだと信じこんでしまう。ウルリッヒは何故こんなにも簡単に、ためらいもなく霊を信じてしまったのか。ウルリッヒは田舎の素朴で信じやすい、恐らくは信心深い人物である。この当時の社会的身分からみて教育もほとんどないであろう。

状況設定や登場人物の数などは異なっているが、*L'auberge* と良く似た話が *La peur* (1882) の中で語られている。その物語の中で語り手は狩りをするために森の番人の小屋へ夜泊めてもらいに行くのであるが、この番人は2年前に密猟者を殺したためその亡霊に取り憑かれており、番人のふたりの息子とその妻たちもまた同じように取り憑かれている。そこで語り手は、亡霊などは存在しないしそんなことはありえないと番人親子を諭すのであるがまったく無駄であった。番人親子は固く亡霊を信じているのである。この当時であればこれはやはり当然で、先のウルリッヒと同様に田舎の、純朴で信じやすい、つまりモーパッサンがクロニックで書いていたような過去の「ためらいなく信じる」人達に属する者たちなのである。一方語り手の方とはといえば、狩りをしに行くというのだけを見ても上流階級に属する人物であることは分かるが、作品の冒頭で恐怖について論ずる

(8) 中村希明『怪談の科学』講談社ブルーバックス 昭和63年 p. 137

ところなどでも理路整然としており、教育程度のかなり高いことが明白に見てとれる。要するに教育があり、合理的思考の持ち主である者から見れば霊の存在など本来あり得ないことであるし、一笑に付すべき事でもある。ウルリッヒや番人親子のようなまだまだ素朴な人々は疑念を生ずるだけの知性も知識も持ち合わせておらず、したがって素直に霊の存在を肯定し得るし信じ込むことができる：

Et Ulrich la (= son âme) sentait là, tout près, derrière le mur, derrière la porte qu'il venait de refermer. Elle rôdait, comme un oiseau de nuit qui frôle de ses plumes une fenêtre éclairée; et le jeune homme éperdu était prêt à hurler d'horreur. Il voulait s'enfuir et n'osait point sortir; il n'osait point et n'oserait plus désormais, car le fantôme resterait là, jour et nuit, autour de l'auberge, tant que le corps du vieux guide n'aurait pas été retrouvé et déposé dans la terre bénite d'un cimetière.⁽⁹⁾

それでも夜が明けると落ち着きを取り戻すのであるが、再び夜になるとまたもや恐怖に捕らえられて小屋の中を歩き廻る。そして昨夜の自分を呼ぶ声が聞こえるのではないかと絶えず耳を澄ましている。すると強烈な孤独感に捕らえられる：

Et il se sentait seul, le misérable, comme aucun homme n'avait jamais été seul ! Il était seul dans cet immense désert de neige, seul à deux mille mètres au-dessus de la terre habitée, au-dessus des maisons humaines, au-dessus de la vie qui s'agite, bruit et palpite, seul dans le ciel glacé !⁽¹⁰⁾

フランシス・ラカサンは：

La peur provoque un détournement des sens: ils transmettent au cerveau une perception erronée qui suggère une interprétation sur-

(9) Pléiade II, p. 792~93

(10) *ibid.*, p. 793

naturelle d'événements ou de faits naturels. Pour jouer pleinement son rôle créateur, la peur a besoin de la réunion de certains facteurs. Le plus favorable est la solitude renforcée ou non par l'éclairage nocturne. ⁽¹¹⁾

と述べているが、ここで重要な要素二つを指摘しておきたい。それはウルリッヒが狭い小屋に閉じ籠もっていることと、今引用したばかりの孤独感である。中村希明氏は先の著書の中で、幻覚は「一人で狭い空間に閉じこめられ、(中略)単調な感覚刺激がくりかえされるという状況に人間がおかれたときに起こる現象であり、幻覚は、孤立と感覚刺激の低下という二つの条件下で起こるのである ⁽¹²⁾」「幻覚を起こす最大のファクターが感覚遮断的な環境である ⁽¹³⁾」と述べておられることに注目しておきたい。この場合の幻覚は感覚遮断性幻覚と呼ばれる。また、「感覚遮断的な条件が少なく、孤立状況という条件だけが強調されても、やはり幻覚は起こるのである。これは孤立性幻覚と呼ばれ ⁽¹⁴⁾」る。つまりウルリッヒはどちらか一方だけでも十分に幻覚を生じる恐れのある条件を二つ共に備えているのである。

この二つの条件に、先にも述べた疲労と入眠時の聴覚過敏がさらに加わる：

Vers minuit, las de marcher, accablé d'angoisse et de peur, il s'assoupit enfin sur une chaise, (...) ⁽¹⁵⁾

そして再び昨夜の叫び声を聞くのである。このあたりは全く理に叶った極めて自然な流れといえる。

ついで恐怖から逃れるためにブランデーのがぶ飲みを始めるが、酔いが

(11) Francis Lacassin, postface de *Qui sait ? et autres histoires étranges*, Union Générale d'Éditions, 1981, p. 281

(12) 中村希明, *op. cit.*, p. 28~29

(13) *ibid.*, p. 31

(14) *ibid.*, p. 32

(15) *Pléiade* II, p. 793

さめると途端に例の叫び声が聞こえるのでこの夜から三週間のあいだ徹底的に飲み続け、ついに小屋にあるブランデーをすべて飲み干してしまう：

En trois semaines, il absorba toute sa provision d'alcool. Mais cette souïerie continue ne faisait qu'assoupir son épouvante qui se réveilla plus furieuse dès qu'il lui fut impossible de la calmer. L'idée fixe alors, exaspérée par un mois d'ivresse, et grandissant sans cesse dans l'absolue solitude, s'enfonçait en lui à la façon d'une vrille.⁽¹⁶⁾

この、多量のアルコール摂取のあと突然の摂取中断というのもまた幻覚・幻聴を生ずる大きな原因のひとつである。アルコール禁断症候群のうち最も代表的なものが振戦せんもうであるという。振戦せんもうとは、大酒家が、急に酒を断った「その晩から一睡もできなくなり、脂汗が出、手や体のふるえが始まり、断酒三日から四日後には、なにもいない壁や天井に小さな虫や蛇や小人などが見えてきたり、自分を呼ぶ声が聞こえたり、天上の音楽のような妙なる調べが聞こえるなど、夢の中にいるような幻覚体験が起こる⁽¹⁷⁾」ものである。また「幻視がほとんどなくて、(中略)幻聴を主体としたアルコール幻覚症もあ⁽¹⁸⁾」って、「幻覚症の幻聴は、悪口であるとか、殺してやるとかの脅迫的な、不安を与えるような内容が多く、同時に、周りをすっかり囲まれるなどの被害感を伴うことが多い⁽¹⁹⁾」。まさにウルリッヒが陥っている状況そのものである。あるいはまた断酒直後の一過性の幻聴や幻視(小離脱症候群)といった症状もある。要するに大量飲酒は幻覚・幻聴の母であるのはよく知られた事実であろう。

このあとウルリッヒは極限状態に追い込まれたあげく、彼を呼ぶものを見、黙らすために戸を開けるがその隙に犬が外に出たのに気が付かないで再び戸を閉めてしまう。当然その犬は入れてもらおうと思って小屋の周りを啼きながら徘徊する。今度は幻聴ではなくはっきりと外の音が聞こえる

(16) *ibid.*, p. 794

(17) 中村希明, *op. cit.*, p. 137

(18) *ibid.*, p. 140

(19) *ibid.*, p. 140~141

のでウルリッヒはかろうじて保っていた理性も吹っ飛んでしまい、ついに発狂してしまうのである（因みに先程の *La peur* でも犬が同じ役割を果たしていた）。

以上、ウルリッヒの置かれた状況とその心理を順を追って見てきたが、モーパッサンがこの方面の知識にどれほど精通していたかがよく分かると共に当時の状況もまた推し量ることも可能である。つまり：

Les contes de Maupassant contiennent des diagnostics et descriptions cliniques conformes aux connaissances médicales du temps, qui sont beaucoup plus 《avancée》 que nous ne le pensons d'ordinaire.⁽²⁰⁾
 ということができる。

*
**

最初に述べたようにその当時の精神医学の発達の影響もあろうし、自身が内包していることを自覚していたこともあるだろうが、モーパッサンは狂気に取り憑かれた人々に興味を持っていた（*Les fous m'attirent. Madame Hermet*⁽²¹⁾）。*Madame Hermet*, *La chevelure*, *Le Horla* (première version), *Qui sait?* などのように精神病院に入院している者を主人公とする作品のみならず、妄想に捉えられて《*Suis-je fou?*》と自問する作中人物が *Fou?*, *Lettre d'un fou*, *Le Horla* (deuxième version) などには登場する。例えば *Fou?* では《*Suis-je fou? ou seulement jaloux?*⁽²²⁾》といきなり冒頭から書き出し、それから語り手は自らの行為を述べ、最終行は再び《*Dites-moi, suis-je fou?*⁽²³⁾》で終わる。語り手の話は冒頭にあるように、語り手の獯猛な嫉妬心による破壊的行為

(20) M.-C. Bancquart, *Maupassant conteur fantastique*, Minard, 1976, p. 31

(21) *Pléiade* II, p. 874

(22) *Maupassant contes et nouvelles, tome I*, Bibliothèque de la Pléiade, 1974, p. 522

(23) *ibid*, p. 526

の物語である。つまり、語り手に対しては心変わりしてしまった恋人が、何者かに情欲に燃える様子を見せるので、ひそかに様子を伺っていると何と彼女は乗馬のあとに愛欲的行為をしてきたような様子を見せる。そこで語り手はあろうことか馬に対して猛烈な嫉妬をおぼえ、その馬をピストルで撃ち殺してしまう、まるで馬が人間であるかのように。正に語り手は妄想にとり憑かれているといえよう。

また例えば *Un cas de divorce* の主人公は花に対して熱烈な愛情を抱く：

Elles(=les fleurs) sont si belles, de structures si fines, si variées et si sensuelles, entrouvertes comme des organes, plus tentantes que des bouches, et creuses avec des lèvres retournées, dentelées, charnues, poudrées d'une semence de vie qui, dans chacune, engendre un parfum différent.

Elles se reproduisent, elles, elles seules, au monde, sans souillure pour leur inviolable race, évaporant autour d'elles l'encens divin de leur amour, la sueur odorante de leurs caresses, l'essence de leurs corps incomparables, de leurs corps parés de toutes les grâces, de toutes les élégances, de toutes les formes, qui ont la coquetterie de toutes les colorations et la séduction enivrante de toute les senteurs (...)

Leur flanc se creuse, odorant et transparent, ouvert pour l'amour et plus tentant que toute la chair des femmes. Les inimaginables²⁰ dessins de leurs petits corps jettent l'âme grisée dans le paradis des images et des voluptés idéales.⁽²⁰⁾

このような妄想が作中人物の頭の中を占めるようになると当然の帰結としてその人物は狂気の中へと落ち込んでいくことになる、ちょうど *La chevelure* の人物のように：

20) *Pléiade II*, p. 780~82

On sentait cet homme ravagé, rongé par sa pensée, par une Pensée, comme un fruit par un ver. Sa Folie, son idée était là, dans cette tête, obstinée, harcelante, dévorante. Elle mangeait le corps peu à peu. Elle, l'Invisible, l'Impalpable, l'Insaisissable, l'Immatérielle Idée minait la chair, buvait le sang, éteignait la vie.⁽²⁵⁾

さきの *Un cas de divorce* はいわゆる法廷物であるが、上記の日記を提出した弁護士はこの人物を哀れな狂人と呼び、また結末で《Les quelques fragments que je viens de vous soumettre vous suffiront, je crois, pour apprécier ce cas de maladie mentale,⁽²⁶⁾》と述べている。

ところで、この主人公の花に対する記述は極めて官能的でエロチックなものであり、彼にとっては花はもはや単なる花ではなく、女性の代替物でありそれ以上のものである。この事情は *La chevelure* の場合でも同じで、この作品の場合主人公は骨董品に対して恋愛にも似た感情を抱いているが、就中、購入した事務機の隠し引き出しから見つけ出した一束の女性の髪の毛に感溺してしまう、まるで女性に対するように。M.-C. バンカールは：

Par l'érotisme, nous entrons dans la véritable cruauté et le véritable fantastique de Maupassant. Expérience du dérèglement et de la désintégration de l'être, reflet d'une angoisse, l'érotisme exprime en effet une liaison de violence qui règne dans le monde entier, et un malaise du Moi.⁽²⁷⁾

と述べているが、前者 *Un cas de divorce* では理想の女性を見つけたと思いその女性と結婚した主人公は、研ぎ澄まされた神経のために生きた現実の女性の不浄さを強く感じて唾棄すべきものとして嫌悪し、それに対する理想的なものとしての花へと引かれてゆく。また、*La chevelure* の

⁽²⁵⁾ *ibid.*, p. 107

⁽²⁶⁾ *ibid.*, p. 783

⁽²⁷⁾ M.-C. Bancquart, *op. cit.*, p. 62

主人公は死への恐怖から現在をさらには未来を恐れ、その反動として過去に魅了され、現実の女性ではないすでに過去の女性に激しくひかれる：

Le passé m'attire, le présent m'effraie parce que l'avenir c'est la mort. Je regrette tout ce qui s'est fait, je pleure tous ceux qui ont vécu; je voudrais arrêter le temps, arrêter l'heure. Mais elle va, elle va, elle passe, elle me prend de seconde en seconde un peu de moi pour le néant de demain. Et je ne revivrait jamais.

Adieu celles d'hier. Je vous aime.⁽²⁸⁾

そして、事務机から見つけた髪の毛に魅入られ、その持ち主を熱愛し、あげくはその女性を再生させてしまうのである（もちろん妄想の産物であるが）。この二作の主人公はもちろん、極めてエロチックな関係にあった *Un fou?* の主人公も人格の崩壊に陥ってしまっており、最早もとの状態に回復することは不可能である。まさに《L'excès érotique ouvre sur la folie, le meurtre, la mort, en même temps qu'il revêt d'une sorte de 《sacré》 ceux qui en sont les victimes.⁽²⁹⁾》といえよう。

さて、幻想作品では何よりも恐怖を生み出さなければならない。たとえば先に取り上げた *L'auberge* などは確かに作中人物が恐怖に捕らわれ人格の崩壊に至るまでの恐ろしい苦しみを味わっているが、この場合は対象が明確であり（つまりウルリッヒにはガスパールという特定の幽霊が出現する）、それに何よりこの作品は臨床医学的モデルケースのようなものであるので、読者は高所から作中人物を見下ろす感じであって読者自身に恐怖感を与えるものではない。《son jeu d'écrivain est d'abolir autant que possible, au moins pour le temps de la lecture, la distance entre son lecteur et son personnage.⁽³⁰⁾》とバンカールは述べているが、このことは幻想作品には特に重要である。読者が作中人物に最も感情移入し易

(28) Pléiade II, p. 109

(29) M.-C. Bancquart, *op. cit.*, p. 60

(30) *ibid.*, p. 33

いのは、物語が告白であれ独白であれ、あるいは手紙・日記であれ一人称の『わたし』が物語るのが最良であることはすでにみてきたが、*Lui?*、*Lettre d'un fou*、*La nuit*、*Le Horla*、*Qui sait?* などその種の作品は全てそうである。その主人公たちはひとりであるか、孤独な状況に置かれている。*Qui sait?* の主人公などはむしろひとりであることを求める（紀行集 *Sur l'eau* の中でモーパッサンもひとりになる喜びを書いている）。P.-G. カステックスは：

Parmi ces contes dont le ressort principal est la peur, les plus émouvants et les plus fantastiques ont pour personnage central un névrosé dont l'équilibre mental succombe ou a succombé momentanément à l'horreur de se sentir seul.⁽³¹⁾

と述べているが、確かに孤独は危険である、《Quand nous sommes seuls longtemps, nous peuplons le vide de fantômes.⁽³²⁾ *Le Horla*》であるから。そして、作中人物が（当然読者も）味わう恐怖は、目に見えない、漠然とした捉えどころのない未知の恐怖である。それは日常の世界のすぐそばにあるいは中にいるのだが知覚できない存在を感じる戦慄なのである。

モーパッサンは上記の作品の作中人物達と同じように神経過敏症であった。紀行集 *La vie errante* の中で、ほんのわずかの刺激にも極度に鋭敏に反応する人達の存在することを述べているが、まさしくモーパッサンがそのひとりなのである。E. メイニアルは：

Il (=Maupassant) a pour tout ce qui affole les nerfs, pour tout ce qui hérisse la chair inquiète, détraque le cerveau, et fait battre plus vite le cœur, une sorte de goût malsain, très apparent dans son

(31) P.-G. Castex, *Le conte fantastique en France de Nodier à Maupassant*, José Corti, 1951, p. 376

(32) Pléade II, p. 921

œuvre. La description minutieuse et implacable de toutes les phases de la terreur, les souvenirs et les impressions personnelles d'une épouvante irrésistible, les cas les plus étranges et les plus inexplicables, la débâcle effroyable qui emporte la volonté et la raison, toutes les variétés et tous les effets de la peur lui ont inspiré des pages saisissantes.⁽³³⁾

と述べているが、はやくも *Boule de suif* と前後して出版された詩集 (1880) の中の *La terreur* で後年のオルラの存在の直観もしくは予感が描かれており、この後モーパッサンはこの感覚から逃れることもこともできずに *Lui? Un fou? Le Horla, Qui sait?* へと辿って、人間を崩壊してしまう恐ろしい存在を見事に活写するのである。

∴ 本稿は学部共同研究費による研究発表の一部を成すものである。

(本学教授)

⁽³³⁾ E. Maynial, *La vie et l'œuvre de Guy de Maupassant*, Société de Mercure de France, 1906, p. 239~40